

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 5 月 31 日現在

機関番号：12101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2015

課題番号：25590156

研究課題名(和文)ポスト震災社会を生きる人々の共同性と縁に関する社会心理学研究の試み

研究課題名(英文) Social psychological approach on the common nature and En of the people who are living post the earthquake disaster society

研究代表者

伊藤 哲司 (Ito, Tetsuji)

茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：70250975

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,400,000円

研究成果の概要(和文)：東日本大震災および福島第一原子力発電所の事故が社会に及ぼした影響については、サステイナビリティ学などの学術的な観点からの真摯な検討が必要である。本研究は、ポスト震災社会のなかで人々がどのようにそのダメージから回復しようとしているのか、いくつかの事例研究を行うと同時に、それらに基づき共同性と縁に着目した理論的検討も行うものである。私たちは縁ある人々との繋がりのなかで自己を回復し、共同性のなかで「安全・安心」社会を紡ぎだしていくしかない。社会心理学が基本概念とする「社会的動物としての人間」という見方を踏まえ、本研究ではポスト震災社会に生きる私たちの共同性と縁について問題提起を行う。

研究成果の概要(英文)：About the consequence of the accident of the Great East Japan Earthquake and the Fukushima Daiichi nuclear power plant having done to society, the earnest examination from scientific viewpoints of sustainability is required. This study performs some case studies for how people are going to recover the damage in post earthquake disaster society, at the same time it performs the theoretical examination which paid its attention to common nature and En (a Japanese word which means "relationship" or "tie"). We have to recover the selves in relation with some people, and begin to spin "safety and relief" society in common nature. Based on the view of "the human being as a social animal" which is a basic concept of social psychology, this study raises an issue on our common nature and En of us who are liven in the post earthquake disaster society.

研究分野：社会心理学

キーワード：ポスト震災社会 共同性 縁 社会心理学 社会的ネットワーク 復興

1. 研究開始当初の背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災およびそれに続いた福島第一原発の事故は、多くのものを破壊し、たくさんの人命が損なわれ、さまざまな側面で私たちの社会にインパクトを与えた。間違いなく今後も長く記録され、また人々の記憶にも残り続けるであろうこの出来事がこの社会に及ぼした影響が何であるのかについては、サステナビリティ学などの学術的な観点からも真摯に検討されなければならない。その必要性は、被害の大きさや今後のハードな防災対策といった主に理系の研究者が担うべきものがある一方で、文系の研究者には、たとえば、ポスト震災社会のなかで人々がどのようにそのダメージから回復しようとしているのかに焦点を当てるのが求められる。このような学術的要請を背景に本研究は、いくつかのフィールドワークを通じた事例研究を行うと同時に、それらに基づいた理論的検討も行うものである。

大震災のあとは、被災地においてもなんとか生き延びた人たちが、それまで赤の他人であった人たちでもお互いに助けあい、励ましあうといったことが顕著に見られた。被災をしなかった人たちも、たくさんの人たちがボランティアとして被災地に自ら足を運んだし、それができなくとも、義援金を寄せることなどを通して、被災地の人々に自分たちの思いを何とか届けようとした。もちろん、そのこと自体は大変尊いことであつたし、心強いことであつたし、多くの人たちが互いに希望を与えあうことでもあつた。

しかし、大災害などの大規模な危機的状況が一度に生じた後に、人々がきわめて利他的になり、「災害ユートピア」(A Paradise Built in Hell)とも呼ばれる特別な共同体が一時的に立ち上がることが知られており、それは日本独特のことでもない(レベッカ, 2010)。また、大災害の後には、人々は何かをしなければならぬという気持ちからあちこち奔走するなど興奮と覚醒の「ハネムーン期」があるとも言われる(ラファエル, 1989)。そしてその時期に精神医学的に問題になるのは、人々の気持ちが極端に落ち込むこと(鬱)よりも、むしろハイになりすぎる(躁)である(安, 1996)。それは、社会や文化を越えて広く見られることである。

そして、このような特別な共同体は、実際には長続きしないことが多い。そのときには多くの人々が味わったであろう絆の素晴らしさを、人々が長く維持していくことは実際には難しい。そもそも絆には、「動物をつなぎとめる綱」という意味があり、さらに「断つのにしのびない恩愛。離れがたい情実」という含意がある(広辞苑第六版)。それは緊急時には素晴らしいものとしてとらえられるとしても、日常生活が取り戻されていくなかで、むしろ私たちを縛るものになっていきかねないのである。実は近代化の過程のなかで、

むしろそれは嫌われたものであつた。

しかし私たちは社会的動物であり、一人で生きていくということではできない。本研究は、そうした知見を踏まえ、では私たちがどのように共同性を編みなおし回復していけばいいのかについて、いくつかのフィールドからの事例と、それらに基づく理論的検討を踏まえて、先述の縁を鍵概念にしつつ示唆を与えようとするものである。そしてそれは、新たな「安全・安心社会」についての提言を含むユニークなものとなるだろう。

本研究は、後に詳述するとおり、東日本大震災後に申請者が立ち上げた、あるいは関わることになった複数のフィールドでの協働実践への関わりをあらためて深め、そこでの参加観察とインタビューを重ねていくものである。そして、それらを単なる事例として併記させるのではなく、縁という鍵概念を横串としながら、それらを貫く知見を生みだしていこうとするものである。もちろん、単にこれまでの申請者の研究の延長ということではない。東日本大震災から時は刻々とたち状況も変化していく。その変化に敏感に対応し、場合によっては新たな動きを申請者みずからが生みだすことをも厭わない。そして各フィールドによりよいと思われる変化を促すこともあるだろう。そのような各フィールドでのアクションリサーチという一面をもつ一方で、それぞれのフィールドのローカルティを繋いだインターローカルな知を、理論的検討から創出することを目論んでいる。

そもそも研究者がフィールドに関わりつつ観察やインタビューを行うのは、自然科学と対置される人間科学の方法論に基づくものである。そこでは研究者は、客観的な態度を貫く傍観者としての観察者ではない。何らかの学術的な知見を一方向的に発信するだけの専門家でもない。各フィールドにおける協働実践者の一人として関わりを深め、フィールドの人々に教えを請い、メンバーの一人として活動する一人となる。もちろんそこに埋没しきってしまうのではなく、そこから抜け出した時空間で、研究者として理論的な検討も行うのである。本研究は、そのような人間科学の方法論に基づいて行うことに常に自覚的であろうとするものである。

2. 研究の目的

本研究ではまず、今回の震災(原発事故を含む)で実際に居住していた地域を失った人々が、人と人との繋がり、すなわち共同性をどう回復しようとしているのかを明らかにする。また直接的に大きな被災を経験しない人々も、たとえば災害ボランティアなどへの参加を通して、それまでの日常生活の中には十全になかったのであろう共同性を回復させようとするといった動きが見られたが、その様相も明らかにする。もちろんそこには、利他的な協力だけでなく、さまざまなズレや行き違いもあるに違いない。それらにも繊細

に目配りをしつつ、社会心理学が基本概念とする「社会的動物としての人間」という見方を踏まえ、縁を鍵概念に理論的な検討も進め、そして、ポスト震災社会に生きる私たちの共同性と縁について、社会心理学の立場から問題提起を行う。

近代化の過程のなかで人々は、地域共同体におけるつながりをむしろ断ち切ってきた。しかし東日本大震災は、自分を取り巻き、自己を成り立たせている人々との縁を省みるきっかけになった。本研究では、そのような共同性の回復ともいえる動きに着目し、それを、これまでの社会心理学研究ではキーワードとして取り上げられることがほとんどなかった縁を鍵概念として取り上げる。私たちは、誰か自分にとって大事な人との出会いを偶然の産物であることに気づきつつも、出会った後は必然であると考えることが多い。そしてそれを「縁がある」と表現する。この縁という概念は、英語などの西洋の言語には直接的には翻訳しがたい、きわめて東洋的なものである。私たちは、この縁を拠り所にして自己を成り立たせているという側面があり、それがポスト震災社会のなかで、よりいっそう自覚されるにいたったと考えられる。国や自治体、専門家が単純には信頼されなくなったのがポスト震災社会の一側面だとすれば、そこに生きる私たちは縁ある人々とのつながりのなかで、自己を回復し、新たに「安全・安心社会」を紡ぎだしていくしかないのではないか。本研究は、その点にも積極的に言及していくものである。

3. 研究の方法

当初計画した研究のフィールド次の3つである。

1) 「大洗応援隊！」

東日本大震災発生約2ヶ月後に結成された社会的ネットワーク。津波等で被害を受け、その後も原発事故の風評被害などを受けている茨城県東茨城郡大洗町の復興を支援している。当初は数人で立ち上がったこの社会的ネットワークには、茨城大学の学生、大洗町の関係者(議員、町役場の役人、地元のNPO法人大洗海の大学関係者、旅館関係者等)、それに町外で大洗町に強い関心を寄せる社会人など100人近くで構成されている。

2) 北茨城あすなる会

茨城県北茨城市で津波による被災を経験し、避難所での一時的な避難生活を体験した人たちが、ある雇用促進住宅に入居し、その後地元NPO法人の支援も受けつつ、住民組織「北茨城あすなる会」を立ち上げた。同じような境遇におかれた人々が互いに助けあう互助組織である。

3) 福島原発事故にかかわる広域避難者への支援と研究(広域避難研)

社会学者たちが中心となって立ち上げた研究および支援のためのネットワークである。主に、全町避難を余儀なくされた福島県

富岡町の住民たちに関わっている。

主にこれら3つのフィールドに、大学院生などの助力も得ながら(申請者に同行してもらって一緒に行動しながら)関わりを深め、参加観察を進めていくと同時に、可能なところからインタビューを実施していくことを計画した。実際には、「大洗応援隊！」とは、現時点(平成28年3月)でも関わりが続いており、研究代表者が勤務する茨城大学人文学部と茨城県大洗町が地域連携協定を結んでいることから、その社会的ネットワークの一メンバーでもあり続けており、多くの声をそのなかで聞いている。

北茨城あすなる会については、それが置かれていた雇用促進住宅の居住期限が過ぎたあと、会は解散し、住民たちはそれぞれのすみかを見出していったために、十分追うことができなくなった。

広域避難研については、その研究ネットワークそのものよりも、そのメンバーが支援しておこなわれた「おせつとみおか」(富岡町次世代継承聞き書きプロジェクト)にアドバイザーや講師というかたちで2年間(平成26年度および27年度)関わることになり、原発事故による避難生活が続く同町出身の年長者が、同じく同町出身の若者に「ふるさと」を語り継ぐ現場に立ち会った。そこであらためて生成される共同性と縁のあり方を知ることになった。

4. 研究成果

以下は、『日韓交流における歴史、社会、文化の諸問題』に寄稿した「社会心理学の視点からみた「縁」」に加筆修正を加えたものである。

(1) 大震災後の社会状況のなかで

日本では毎年、その一年の世相を表す漢字一文字が年末に日本漢字能力検定協会によって選ばれる。1995年から2010年にかけて選ばれてきた漢字は「震」「食」「倒」「毒」「末」「金」「戦」「帰」「虎」「災」「愛」「命」「偽」「変」「新」「暑」であった。ここでそれらの選定理由を詳しく解説する余裕はないが、それぞれの年に起こった象徴的な災害や事件、出来事などを多義的に表しており興味深い。そして東日本大震災が発生した2011年の末、「今年の漢字」に選ばれたのは「絆」であった(ちなみに2012年は「金」である)。この年は、これほどまでに「絆」という一文字がこれほどまでにあちこちで使われるということはなかったのではないかとというくらいに、この漢字に多くの人の特別な思いが込められたようである。家族との絆、友人との絆、地域の人々との絆、そしてそれまで繋がりのなかった人同士の新たに生まれた絆……。日本の総務省や外務省までもが「絆プロジェクト」という言葉を使い、震災後を生きる多くの人が、人と人との繋がりの大切さを省みることになったのだろう。

しかし、この漢字に深く感じ入るものがあ

った人たちの思いとは裏腹に、「絆」にはもともと「動物をつなぎとめる綱」という意味があり、さらに「断つのにしのびない恩愛。離れがたい情実」という含意もある（広辞苑第六版）。映画化もされたウィリアム・サマセット・モーム（William Somerset Maugham）の小説『人間の絆』の元タイトルは、『Of Human Bondage』であった。言うまでもなく英語の「bondage」には、「行動の自由の束縛」、あるいは「隷属性」といった意味があり、むしろそれは、私たちを縛りつけ拘束するものである。「絆」を「きずな」ではなく「ほだし」と読めば、そのような意味合いが、日本語としてもいっそう立ち上がってくる。

大震災が起こってしまったあとに、「絆」という漢字が盛んに用いられるようになった背景には、近年の日本社会で「人間関係が希薄化」し、「地域社会が崩壊」して、それ故に様々な社会問題が起こっていると見られていたことへの反省があるのだろう。たしかに、とくに都市部を中心に、隣近所誰が住んでいるのかわからないといったことはけっして珍しいことではない。地域社会における人々の繋がりが薄いことは、たとえば子どもがいる世帯の子ども会への加入率が低下しているといったかたちでも現れている。ベトナムでも都市部ではそのような問題が生じつつあるのかもしれないが、日本のそのほうがはるかにこの問題は進行している。

大震災のあとは、被災地においてもなんとか生き延びた人たちが、それまで赤の他人であった人たちでもお互いに助けあい、励ましあうといったことが顕著に見られた。被災をしなかった人たちも、たくさんの人たちがボランティアとして被災地に自ら足を運んだし、それができなくとも、義援金を寄せるなどのことを通して、被災地の人々に自分たちの思いを何とか届けようとした（無論、ベトナムの人々が1日の給与分を寄付するという運動を展開してくれことも、日本人たちの多くは知っている）。もちろん、そのこと自体は大変尊いことであつたし、心強いことであつたし、多くの人たちに希望を与えあうことでもあつた。震災後に、人々がパニックを起こすこともなく、略奪行為などを起こすこともほとんどなく落ち着いてふるまっている様子。個々にはむろんいろいろなことがあつたのであろうが、たとえばアメリカなどの海外で、日本人への賞賛というかたちで報道されていたと聞く。

ただ、大災害などの大規模な危機的状況が一度に生じた後に、人々がきわめて利他的になり、「災害ユートピア」（A Paradise Built in Hell）とも呼ばれる特別な共同体が一時的に立ち上がることが知られており、それは日本独特のことではないことには、留意しておく必要があるだろう（レベッカ，2010）。また、大災害の後には、人々は何かをしなければならぬという気持ちからあちこち奔走するなど興奮と覚醒の「ハネムーン期」が

あるとも言われる（ラファエル，1989）。そしてその時期に精神医学的に問題になるのは、人々の気持ちが極端に落ち込むこと（鬱）よりも、むしろハイになりすぎる（躁）である（安，1996）。それは、おそらく社会や文化を越えて広く見られることである。

加えて、このような特別な共同体は、長続きしないことが多いと言われる。そのときには多くの人々が味わったであろう「絆」の素晴らしさを、人々が長く維持していくことは難しい。そもそも今の日本社会が「絆」があまり感じられないものになっていた（なっている）のは、実は、とくに都市部を中心に人々がそれを、むしろ嫌ってきたからに他ならない。それは先に述べた、肯定的な意味での「きずな」ではなく、否定的な意味での「ほだし」を断ち切っていくこと、あるいは断ち切るまでいかないと薄めていくことが近代化の一面であり、それはとくに都市部で顕著な現象であつた。

（2）心理学からみた「縁」

さて、社会心理学において「縁」はどのように扱われ研究されてきたかということ、これまでの流れを受けて解説したいところであるが、社会心理学に限らず心理学においては、「縁」というキーワードには、それこそこれまでほとんど縁がなかった。『心理学事典』の類いのどれにも、研究代表者の知限り心理学の専門用語として「縁」が挙げられているものはない。

その理由を考えてみるに、さしあたり2つのことが思い当たる。

ひとつは、英語などの西洋の言語には、「縁」に直接に当たる言葉が見当たらないことである。もちろん和英辞典を見れば、「縁」に当たる英語として「chance」「tie」「relationship」「link」「knot」などが載っているが、どれひとつとっても「縁」の概念を言い当てているとは思えない。おそらく英語以外の西洋の言語も同様なのであろう。となれば、西洋の心理学で「縁」が専門用語になるわけもなく、長年にわたって輸入学問であり続けた心理学で、日本でもそれが取り上げられることがなかったのは、当然の帰結であつたのだろう。

ただ輸入学問からの脱皮ということが日本の心理学界で主張されるようになってから、少なくとも20年はたつた。それでもなお、「縁の心理学」が生まれていないならば、さらに他の理由もありそうである。それは、心理学が有している「暗黙の人間観」にあるのではないかと研究代表者は見る。

心理学では、基本的に人間は主体的に意思決定し行動できる存在であると捉えられている。そして自らの意思で何かを学びとり、発達していくことができるものとされている。もちろん何らかの要因で、そのような主体的な思考や行動が阻害されてしまうことはある。そしてさらに「病んだ心」なってしまった場合には、カウンセリングなど「心の

専門家」によるケアが必要だということにもなる。しかしそれでも、この人間の主体性については、基本的に疑問を差し挟まれることはないのが心理学の「暗黙の人間観」である。もちろんこれは、心理学が西洋発の学問であることに由来しているであろう。

しかし現実の人間はどうかと言えば、そのような自分の「生き方」を選び取れるばかりの存在では、どうやらなさそうだ。冤罪事件に巻き込まれ、やむにやまれぬ「自白」に追い込まれた人々の供述の分析等に関わってきた発達心理学者の浜田寿美男は、「生き方」という主体性が色濃く感じられる言葉に違和感を覚え、人は与えられた条件をどうにか引き受けて「生きるかたち」を成形していると述べる。浜田は、心理学の捉え直し、語り直しを試みた研究代表者との往復書簡のなかで、既存の心理学を批判し、「もうひとつの心理学」が必要であると述べている（浜田・伊藤、2010）。

そのような人間の主体性を必ずしも前提としない「もうひとつの心理学」がかたちをなしていったときには、「縁」もまた心理学の重要な専門用語のひとつとして扱われるようになっていくのかもしれない。

（3）再び、大震災後の社会状況のなかで

「絆」という言葉の裏側にはりついた否定的な意味合いに比べれば、「縁」はもっとまるやかで、ソフトな無理のない概念であるように思われる。人は、もともとは単なる偶然にすぎないであろう人との繋がりができたときに「縁がありますね」と口にしたりする。中国語由来と思われるこの言葉は、同じ漢字文化圏である韓国／朝鮮にもあるだろうし、私自身が主な研究フィールドとしてきたベトナムにもある。現在のベトナム語は漢字をまったく使わなくなっているが、ベトナム語の約7割はなお漢字で書けると言われる。「duyen（発音は「ズエン」）とアルファベットで表記されるベトナム語の「縁」。日本語の「縁がある」とほぼ同じニュアンスで、「co duyen」と表現される。

ただし、結果としてできた「縁」がすべて良きものとは限らないのは、「縁を切りたい」といった表現があることから容易に理解できる。それは、いったん夫婦となったカップルなどの「縁」に限らず、たとえば「血縁」と呼ばれる血の繋がった家族・親戚との関係を断ちたいということもありうる。江戸時代に夫と離別したい妻が駆け込んだという縁切寺の存在は、縁を切ることの難しさを物語るものであるし、現在では縁を切ることの手助けをする「別れさせ屋」というビジネスまで成立しているようである。恋人と別れる、夫婦が離婚するといったことが、様々な禍根を残すことになるのは、時代を超えて普遍的なことなのだろう。

しかし私たちは社会的動物である。誰かと繋がり、ときに葛藤を覚えたとしても、互いに支えあうなかでしか生きていくことがで

きない。そのかたちを、自分が主体的にすべてコントロールして築いていけるとするのは幻想で、そのように自分の人生を自分の意思にそってすべて組み立てていくことはほとんど不可能である。にもかかわらず、なんとかそこであがきつつ、とくに震災後は、そうした自分の周囲の人たちとの縁を見直していきたい、できれば少し良きものに変えていきたいという動きが、あちこちで起こっているようである。

今や欠かせないもののひとつになったインターネットが果たしている役割も見逃せない。なかでも SNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）と総称されるツイッターやフェイスブックなどは、プライバシーが必ずしも守られないとか、匿名性ゆえの暴力的な言動がまかり通るといった問題を孕みつつ、これまでにない人と人との繋がりを紡ぎだしている。研究代表者も、大震災後にこれらを使い始めたのであるが、とくにフェイスブックは、身近な人たちとあらためて繋がることができる。たとえばゼミ生とのやりとりでも利用しているのみならず、もう長年会っていない旧友との再び繋がり、あるいは地理的に離れて普段はほとんど会う機会が作れない知人との繋がりを作ってくれるツールとして、大変重宝している。そして実際そこから、旧友とあることを始めるといった、このツールがなければできなかったであろうことが、研究代表者のまわりでも動き始めている。

大震災とそれに続く原発事故を経験して、国や自治体、専門家などが単純には信頼されなくなったと言われる。原子力政策が「安全」を保障していないことが明らかになった現在、その「安全」は「神話」であったと言われるわけである。もはや「安全」は、外部から与えられるものではなく、私たちのなかなか紡ぎだしていかねばならないものとなった。そこでは絶対的な「安全」はなしし、ゆえにすっかり「安心」してしまうわけにもいかない。しかし不安を内包しつつ、それを少し上回る「安心」を得ていくために、私たちは一市民として、縁ある人々と時に強固に、時に緩やかに繋がりながら生きていくしかないだろう。

平安時代の書物『成唯識論述記（じょうゆいしきろんじゅつぎ）』に出てくる「安危共同（あんぎぐどう）」という言葉があるという。安心と不安を同時に受け止め、それらが共同である実態を見抜くという教えである。安心と不安は表裏一体のものであるということであろう。縁ある人との有意味な関係こそが、この時代にあって不安をぬぐいきれないにもかかわらず、わずかにでも上回る安心を得られる源なのではなからうか。

（引用文献）

安克昌 1996 心の傷を癒すということ

神戸...365日 作品社

浜田寿美男・伊藤哲司 2010 「渦中」の心

理学へ：往復書簡・心理学を語りなおす
新曜社

レベッカ・ソルニット 2010 災害ユートピア：なぜ そのとき特別な共同体が立ち上がるのか 亜紀書房

ラファエル・ピヴァリー 1989 災害の襲うとき みすず書房

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

伊藤哲司 2015 社会心理学の視点からみた「縁」 日越交流における歴史、社会、文化の諸問題, 1, 195-201. (査読無)

ITO Tetsuji 2013 Chu "Duyen" trong tam ly hoc xa hoi. (社会心理学の視点から見た「縁」) Nghien Cuu Dong Bac A (東北アジア研究), 9, 53-58. (ベトナム語) (査読無)

〔学会発表〕(計5件)

ITO Tetsuji What is the concept of Kizuna, tie, relationship, or bondage? : Critical review in the situation after the Grate East-Japan Earthquake 2011. International Psychology Association. 2016年7月28日 Pacifico Yokohama.

伊藤哲司 コミュニティ再生・社会転換の立場から(シンポジウム「レジリエンス」は私たち(=質的研究者)に何をもたらすのだろうか?) 日本質的心理学会第12回大会 2015年10月3日 宮城教育大学
伊藤哲司 おばちゃんたちの交流「サンガ岩手」を取材して(シンポジウム「被災地の復興の経験とは何か」)日本質的心理学会第11回大会 2014年10月18日~19日 松山大学

伊藤哲司 社会心理学の視点からみた「縁」 日文研第20回海外シンポジウム(招待講演)ベトナム社会科学院東北アジア研究所 2013年11月14日

伊藤哲司 地域のサステナ活動をつなぐポスターワークショップの挑戦：新たな「安全・安心社会」の創出のために 日本質的心理学会第10回大会 2013年8月31日 立命館大学

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

取得状況(計0件)

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

伊藤 哲司 (ITO Tetsuji)
茨城大学・人文学部・教授

研究者番号：70250975